

第4章

楽しむ子育て

育児休業の醍醐味は、子どもと一緒に過ごせること。パパたちの子育てとは？

- 母乳が出ないことがパパ育児の関門。昔ながらの方法で乗り切った
- 家族でいろいろな料理にチャレンジ！
- 思い通りに進まないことはあるけれども、徐々に赤ちゃんが何を要求しているのかわかるように
- 今までは人から教えられた我が子の「初めて」。育休取得でその瞬間を自分の目で
- パパもママも一緒に育児スタートすれば、パパも子育てを続けていける

先輩育休パパから



4-01 妻とのケンカがきっかけで育児休業に。日々成長するわが子に、ときには感動の涙さえも

売り言葉に買い言葉

飯塚 宏志 さん

きっかけは妻とのケンカからでした。

妻は福祉職。向上心にあふれ、日本の福祉に疑問を持ち、常に自己研鑽を欠かさず、国家資格をいくつも持っているスーパーウーマン。もちろん出産前から正職員です。

妻の口癖は

「女は妊娠出産により、仕事や私生活に制限を強いられる。不公平だ！」

それに対し私は

「そうね。」

と無責任な対応。

その妻が結婚2年後にめでたく妊娠。

念願の第一子は女の子。育児休業は妻。夜泣きに苦労したのも出産後最初の一週間くらい。2カ月を過ぎると「まあ、大変だけど、なんとかなっている。」というのが私の感想でした。

私の生活は、子供が生まれてもあまり変化がありません。好きなサッカーも今までどおり。週に2回の夜間練習。週末には試合。そして、たまにはゴルフ。忘年会に新年会。こんな男、多いですね。

妻が、そんな私に不満を持つのは当然です。なにせバリバリのスーパーウーマン。そのキャリアが育児により中断されているわけですから。そんな妻が言った一言から全てが始まります。

「男はいいよね。子供ができて何も変わらない生活を送れて。楽しいでしょ。私はちっ

とも楽しくない！」

ちょっとイヤミっぽいと感じた私は、

「なーに言っちゃってんの。そんな思いじゃいつも一緒にいる子供がかわいそうだよ。育児うらやましいね。長い休み俺ももらいたいなー。」

さらに、

「俺ならそんなマイナス気分にならないね。育児楽しそー。頭アフロにでもしようかな。」と、言ってはいけなことを発言。

当然妻は激怒。売り言葉に買い言葉。なんだかんだあって、最終的に「次の子供は私が育児休業」ってことになっていました。

そして第二子を妊娠。育児休業の誓いから5年の月日が流れていました。とぼけて無かったことにしようとしていた私に、妻は

「覚えているよね。準備よろしく。」

「おう、もちろんさ。」

妻といろいろ話し合った結果、月齢9カ月までは妻が休み、仕上げの3カ月を私が休むことになりました。第二子はやんちゃな男の子です。

決断した私は、まず直属の上司に報告することにしました。(ダメとはいわれないうけど、嫌な顔するのかな。)と複雑な心境。

その上司は

「育児? うん。良いことだね。」と一言。

それからはとんとん拍子。わが職場では初の「男の育休」。「初男」であります。次世

代育児行動計画の追い風もあり、周りは応援ムード。「すごいねー。」やら「がんばって。」など。まるでアポロに乗りこむ宇宙飛行士にでもなったような気分です。

諸手続きを済ませ、育児休業開始 1 カ月前には、代わりの職員が送り来まれてきました。(なんて素敵な人事。) 十分な引継ぎをこなしたのち、いよいよ月へと旅立ちました。

「休み中、何して遊ぼうかな。」
なんて考えていた私。勘違いに気づいたときはもう手遅れです。

6:00 朝の離乳食、ミルク、おむつ交換から始まり、家族の朝食用意。お姉ちゃんの保育園の準備をし、赤ちゃんを連れてお姉ちゃんを保育園へ、帰るともう二回目のミルク。おむつ。10 時前にはお昼寝をさせ、その間に食器を洗う。洗濯物たたんで干している間に、赤ちゃん起きる。昼の離乳食。ミルク。自分の昼飯食べたら午後のお昼寝。無残な部屋を片付けている間に……。気づくと夕方。保育園にお姉ちゃんを迎えに行ったら、晩飯の準備。妻の帰りは 9 時……。部屋には洗濯物が山と積まれ、キッチンのシンクには哺乳瓶や食器があふれていました。毎日があっという間に過ぎて行きました。

我に返ったのは、育児開始から 1 カ月を過ぎてからでした。少々の時間が出来た私は、日々成長するわが子に気づきます。

「昨日まで、すっ転んでいたふすまの敷居を今日は慎重にクリアーしている！」

「おお、テーブルの上に登るのは良くないが、下りるときのアクションが合理的だ！」

「ん？俺に向かってなにカアピールしている。こんなことは初めてだ。しかし、まったく理解不能！」

自然に笑顔がこぼれます。ママへの報告も楽しみの一つです。

「なにー！もうドリブルを！天才だ……。」

ときには感動の涙さえも。

息子と二人きりの時間。かけがえのない息子を独り占め。へその緒はつながっていなかったけど、目の前で泣いている息子は、間違いなく私の息子です。

「育児をしない男を父親とは呼ばない。」

一昔話題を呼んだキャッチコピーです。

「育児が男を父親にしてくれる。」

私はそう思います。

おっと、息子が夜泣きです。それではこの辺で。

執筆者の横顔：

地方公務員・主任 30代後半 30代後半
平成20年4月～6月(3ヵ月間)





4-02 おっぱいなしではなかなか昼寝をしなかった息子も、背中をあたたかさでぐっすり昼寝

オンブマン

石井 聡 さん

妻の産休、そして1年2ヵ月間の育休を引き継いで1年間の育休を取得しました。仕事も家事も夫婦で対等に、という考えのもと、育休も同じくらい、と考えた結果です。

初めての子どもでもあり、夫婦ともに30代後半でもあったので、最後かもしれない子育てにじっくり向き合ってみたいと考えてみてのことです。私は、育休後半の1歳3ヵ月から2歳3ヵ月までの間を受け持つことになったわけですが、なかなか妻ほどにはうまくいかないことに苛立ちながらも、楽しい1年間でした。

夫婦にとって、私が育休を取得した1番のメリットは、妻の職場復帰へのストレスが最

小限であったことだと思います。復職には、人間関係、体力など、不安がありますが、復職時に他人に預けるのではなく、子どもが慣れた自宅でそのまま過ごせたことは、復職への不安の要因をひとつ減らすことにつながったと思います。

私が引継ぎ、育休初期に一番苦労したことは、家事ではなく、「子どもの昼寝」でした。家事の面では、妻から引継ぎに当たり、「家事は後回しで、まず子ども」と言ってもらったこともあり、食べ散らかしたお皿がシンクに重なっていても、許してもらおうような日々が続きました。1歳から2歳の時期は、まだまだ昼寝が必要で、少なくとも1回は寝ない





と体調が悪くなりますし、第一に不機嫌になります。それと、自分の時間がわずかでももてないということもありました。

そこで、何とか気分よく、1時間でも2時間でも寝てくれないかな、ということが育休初期の課題になりました。ところが、今まで、おっぱいを飲みながら、気分よく寝ていた息子は、おっぱいなしにはなかなか寝てくれません。そんななかで、苦心した上で編み出した方法が、昔ながらのおんぶでした。10キロを超える息子をおんぶして、ときには1時間近くも歩き続けることもありました。後になって聞いたことですが、近所のお年寄りの

中では、「近頃、赤ん坊をおんぶしている男の人がいる」とちょっと気になる存在であったようです。おんぶをすると、背中 of 暖かさなのか、気分よく寝てくれたので、それが日課となりました。知り合いの子どもからは、「オンブマン」と呼ばれるように。そして、そんな規則正しい生活のせいかな、私が5キロもダイエットすることにもなりました。

こうした経験が、これから私や息子にどんなものを生んでくれるかはわかりませんが、私の中では、息子とふれあい、何も求めずにただ向き合った時間として残っていくものだと想っています。



執筆者の横顔：

公務員 300人～999人 30代後半
30代後半 本人・妻・子1人(2歳10カ月)
平成19年4月～20年3月(1年間)



4-03 ママ友と話すことで不安が解消。妻も心の支えに。息子との触れ合いで一緒に成長できた1年

妻や息子、ママ友など沢山の人の支えられた育児休業

石原 尚樹 さん

「育児休業」ってなんだろう？ 男性には関係ないと思いきみ、始めは知ろうともしませんでした。我が家も第1子に男の子を授かった時、ただ漠然と、休みの日だけでも子どもと一緒にいるのは楽しいので、育児休業を利用すれば毎日ハッピーに違いない！ と思っていました。

そんな育児休業を取得したい！ と妻に話をすると、「あなたには出来ないわよ」と言われました。最初は家事も出来ない私には無理だという意味かと思いました。確かに今まで、家事をほとんどしていませんでしたので、食事も作れない私に大切な息子を1年間も預けるのは心配なのだろうと。しかし、妻の言った言葉の意味は、育児休業をとって少し違うのだなと感じることになります。

さて、家族や職場での理解を得ながら、息子が1歳2カ月の時に育児休業を妻から引継ぎ、1年間の育児休業を取得することになりました。仕事では引継ぎがままならず、迷惑をかけながらも、協力的な雰囲気でもらいました。そんな形で育児休業を取得するにあたって、阻害するものはほとんどありませんでした。しかし、お金の面では苦労することになりました。子どもが1歳を過ぎているので、育児休業の手当はなく、貯金

を取り崩しながら生活しました。これからマイホームを考えている人や購入した人は、育児休業を取得する阻害になっていると思います。私はアパートに住んでいて、マイホームは先回しに考えていたので、もしマイホームを購入していたら育児休業は取得していませんでした。

そんなこんなで期待と不安の生活が1歳2カ月の息子とスタートし、楽しくも波乱の1年間を過ごしたのですが、当時日記に3つの感じたことを書きとめてありました。

1つ目は、育児休業スタート時は職場からの情報がなくなり、急に孤立したような感覚になったことです。そこで、私は妻が入っていた育児サークルに参加し（女性だけで男性は私だけでした）、親子が集まり公園で遊んだり、ランチしたり、いちご狩りしたりしました。最初は抵抗がありましたが、参加することにより、私はママ友達ができ、同じ境遇の人と話をしたりする中で、不安が解消し人と繋がっているような感覚になり、楽しく子どもと過ごせるようになりました。そういった中で不思議と最初の孤立感はなくなってきました。息子もサークルなどで外に遊びに出ると楽しそうでした。

2つ目は、子どものペースに合わせ、自分

の時間が全くないということです。慣れない家事や育児を同時に、しかも1日のスケジュールを考えながら行動しなければならない状況はとても大変で、これは私にとってかなりのストレスでした。食事を作るのも素人なのに、「だっこ、だっこ」とくっついて離れません。お昼だからお腹も空いて早く食べたいのに、抱っこしながら料理はつくれなし、おんぶは嫌がるし、降ろすと泣いて離れない。こっちが泣きたくなるような事の繰り返しで、仕事をする中では体験できないものでした。

3つ目は、世の中は家事や育児というものはやって当たり前という感覚で、ちゃんとやっていても褒められることはないということです。家事が苦手なのに、がんばったことを評価してくれる人がいないと精神的にも負担になってきます。そんな時、妻はそんな自分を褒めてくれたり話を聞いてくれたり

し、心の支えとなってくれました。その時、育児休業をとる前に言われた「あなたにはできない」という言葉を思い出し、「あっ！家事ができないのはもちろん、妻が育児や家事をしている時に妻の話を良く聞いてあげることができなかつた。育児と家事をしていて大変な思いだったことを共有できていなかったなあ。」と感じました。人に認めてもらうということは大切だと思いました。

最後に、育児休業を取得して本当に良かったです。とても大変な1年間でしたが、息子と触れ合え一緒に成長できた1年間は何事にも変えがたいものでした。また、仕事に復帰し半年ですが、子どもと多く触れ合う時間を持ちたいので、残業をしないよう時間内に集中して仕事をするようになりました。家事も前より出来るようになり、地域の様子も分かりました。もし、第2子が誕生したら、また取りたいと思います。



執筆者の横顔：

公務員 300人～999人 30代前半
20代後半 本人・妻・子1人
平成19年4月～20年3月(1年間)



4-04 子どもの世話と家事に追われ、楽しかった育児休業。日々変わる子どもの様子も楽しみの一つ

育児休業を取ってみて

大木 滋 さん

「育休とってみる？」と妊娠中の妻が言い出した。男性が育児休業を取ったという話を聞いたこともなかったし、そのような情報を耳にしたこともなかった私は当然「え？ 取れるの？」となった。

妻の職場は人数が少なく、職場責任者でもあり、育休が取り難い立場である。対して私は特に役職もなく、休暇をとっても差し支えない立場であった。加えて、子育てに興味があったこと、授乳は粉ミルクをしようすることにしていたので自分でも出来るかもと思ったこと、経済面で私が育児休業を取ったほうが有利だったこと等、妻の育児や家事の負担軽減を考えた結果、私が育児休業を取ることを

決意した。

上司に尋ねると、「男性も育児休業を取得出来る制度があることは知っているが、職場に前例がなく取得できるかどうかは上に聞いてみる」との回答をもらった。数日後、取得可能との返事をもらい、妻が産休育休を合わせて三カ月取った後の九カ月間、私が育児休業に入ることが決まった。

育児休業に入る旨を同じ課の同僚に話すと、「あれって男性も取れるの？」と知らない様子だった。やはり男性が育児に専念するのは世間的にとっても珍しいことなのだろう。親や親戚に話した時も、男性が育児休業を取得することに対しあまりよい反応をされな





かった。

「夫は仕事、妻は育児と家事」という考えが未だに根強くあるのだなあと思った。

取得前は、子供につきっきりでないといけないのか、子供が病気になったり怪我をした時にちゃんと対応できるのか、育児の傍ら家事はこなせるのか等不安であった。しかし、これらの不安はまったくの取り越し苦労で、育児・家事は妻が足りないところを補ってくれ、程よく分担してやっていけたので、大変だと思ったことは殆どなかった。その分、心にゆとりができたせいか、育児にイライラすることもなく、余裕を持って子供に接するこ

とが出来た。おかげで子供は私にも妻にも懐いており、他で聞くような育児の問題に困ることはなかった。日々変わる子供の様子や世話と家事に追われる日々をむしろ楽しんで過ごせた九カ月間であった。

育児休業を取るにあたり、周囲の理解というのは重要だと思う。男性はもちろん女性ですら産休や育休を取得できない会社の話をよく聞くが、私の職場ではそのようなことを全くなく、「頑張ってますか?」「子育て大変じゃない?」等の声を掛けてもらい、理解のある環境を大変有り難く思っている。



執筆者の横顔：

会社員 300人～999人 30代前半
30代前半 本人・妻・子1人(男児1人(1歳))
平成19年11月～20年8月(9ヵ月間)



4-05 世話をすればするほど子どもへの愛着が沸き、父親として精一杯育てていく覚悟ができた

育児休業に感謝！

大塚 亮平 さん

私は現在、家庭医（かかりつけ医、いわゆるホームドクター）の研修医として米国に留学中である。渡米時に妻は妊娠6カ月であったが、初めての出産ということもあり、妻は産後まで日本に滞在することとなった。

「家庭医」は子供からお年寄りまで臓器に関らず包括的に診療し、妊婦検診や出産・分娩にも立ち会うため、日常の診療を通して日米の家族関係の相違や米国での父親の育児参加について垣間見る機会がある。例えば、妊婦検診や乳幼児健診はたいてい父親同伴であるし、出産には必ず夫が立ち会う。帝王切開の場合でももちろんである。また出産後は母児の部屋に泊まり赤ちゃんの世話をを行う。

私は元々子育てには関りたいと考えていたが、米国でこのような父親像を見るにつれ、我が子が生まれる時は是非立ち会って面倒を見たいと強く思うようになった。上司に相談したところ、快く一カ月間の休みをくれた。

こうして出産前に帰国し、帝王切開の出産に立会わせてもらうことができた。生まれた時は、感動と共にまだ信じられないような複雑な気持ちであった。医師として子供と関わることはあっても、実際に我が子となると正直どのように関ったらよいかわからなかった。何はともあれ見様見真似で世話をした。

沐浴指導や退院指導などに積極的に参加し、育児書の類も読んだ。世話をすればするほど、我が子への愛着が沸いてくるのを感じた。

同時に父親にもできることが沢山あることに気づいた。おむつ交換、着替え、お風呂、洗い物、一緒に遊ぶことや寝かしつけなど母乳の授乳以外は全てと言っていいほど可能であった。

また母親は育児への責任感やプレッシャーを誰よりも強く感じており、家族形態などの環境変化も伴い精神的に不安定になりやすい時期である。父親は、母親の身体的負担を減らすことができるだけでなく、精神的な支えとしても最も身近で最大の理解者であることも自覚した。実際に妻からも「たくさん話を聞いてくれて、楽しく赤ちゃんに接する余裕が持てた」と言ってもらい、育児休業をとって本当に良かったと思った。

一方で、父親が育児に参加しにくい環境があることも感じた。妊婦検診には父親は仕事を休みづらいため同伴が難しく、たとえ同伴しても診察室に同席しにくい雰囲気があるのも事実である。また産後の集団育児指導のほとんどは母親向けである。母乳を通しての繋がりも母親のみの恩恵であり、その上父親の仕事が多忙で赤ちゃんに過ごす時間が少ない



と、育児の駆け出しの大部分は母親が担うことになる。そうしているうちに、いつの間にか「育児は母親、仕事は父親」のような性別分業ができあがるのかもしれないと思った。

社会全体として父親が育児に参加しやすい環境を作って欲しいと切に願う。男性の育児休業を積極的に奨励し、妊婦検診の同伴や出産の立会い、出産後数日の育児休業などは誰もが取れるようになって欲しい。また医療者側も、妊娠中から父親の参加をもっと促し、「母親学級」から「両親学級」へと名実と共に変更し、産後は父親が長時間滞在しやすい母児同室の部屋などアメニティの工夫も検討していただきたい。

今回の育児休業は貴重な経験であった。生まれたばかりの子と四六時中ともに過ごすことにより、この子が大きくなるまで父親として精一杯育てていくという覚悟ができたように思う。また子育てという経験を通して、世

間の人を経験する喜びや苦勞を知り、仕事だけではない社会に生きていく価値観を見出すことができた。

父親が育児に参加することは少子化を抱える現代社会にとっても良い影響があると思う。育児休業を取った父親は、産休・育休をとる職員に理解を示しやすくなり、また女性職員は妊娠・出産で休業することに後ろめたさを感じにくくなるだろう。それが職場の中で男女共に育児に参加しやすい雰囲気づくりにつながると思われる。さらには、母親の負担が軽減し育児をより楽しむ余裕を持てるようになると、「二人目、三人目もいいなあ」と考えられるようになるのではないだろうか。



執筆者の横顔：

医師 100～299人 20代後半 20代後半
本人・妻・子1人 平成20年9月～10月(1ヵ月間)



4-06 子育ての醍醐味は、子どもの「初めて」に遭遇すること。妻への報告も嬉しかったことの一つ

初めてに遭遇

岡本 暁さん

乳児検診の質問事項に父親の協力が得られているか？の質問があり、ドキッとした。その質問に妻はYesに○を付けてくれた。本当に○なんだろうかとすごく悩んだ。仕事が忙しく、子どもが起きる前に仕事に行き、寝た後に帰るといふ毎日に加え、出張続きの毎日。そして、基本的に子供たちの機嫌の良いときしか見ていなかった。大泣きしたときやウンチをしたときは、決まって妻に押し付けていた。これではいけないと思い、2人目の子供が生まれたとき、妻との交代で育児休業を取得することを決意した。上司に育児休業を取ることを伝えるのに何日か要したが、その後はスムーズに育児休業にたどり着いた。

当初は、育児と家事を行うことの大変さを実感し、取得したことへの後悔ばかりが先にたっていた。しかし、「初めて走った」「初めてジャンプした」「初めてトイレでウンチができた」などの初めてに出会えた。子供たちの「初めてに遭遇」して、これが子育ての醍醐味だと実感した。妻へのメールに「今日ジャンプできたよ！」などの報告がうれしくてし

かたなかった。今までは寝返りをした、ハイハイをした、つかまり立ちをしたなどのうれしい出来事は妻が最初の発見者であったからだ。

毎日の生活のリズムは、午前中は親子サロンなどの施設に出向いたり、近所の公園に散歩に出かけたりと外出するようにしていた。帰宅してから、昼食をとり昼寝、その間に夕食の準備や家事を。子供たちが昼寝から起きたらおやつ&近所への散歩。そして夕食の準備をして妻の帰りを待つ。これがおおまかな一日の流れである。一日がアツという間に過ぎていった。育児休業期間中は子供達の機嫌の良し悪しに関わらず、すべて自分でやらなければならない、とても戸惑った。1カ月がたった頃から少しずつ上手に対処できるようになってきて、不安がある程度解消されると、子供たちとの生活をとても楽しめるようになった。しかし、毎日がずっと良い時ではなく、ストレスもたまり、イライラして子供たちにやつ当たりをすることもあった。記録としてつけていた育児日記に子供たちから



の言葉として「とーちゃんはバイキンマンみたい!」と記録している日がある。子供たちも雰囲気から察していたのだと思う。そういうとき、祖父母の力を借りてリフレッシュさせてもらったり、妻に子供たちを預けてリフレッシュしたりと気分転換を図って、子供たちに心の中で謝りながら次の日を迎えていた。

このように心の中では良いときばかりではなかったが、子供たちの少しずつの成長を楽しみにしながら、そして、家族の協力を得ながら過ごせた1年だったと思う。

職場復帰して、子供たちにとっても保育園に通うという新しい生活が始まった。日曜日

の夜、明日から1週間頑張ろうねと声をかけるが、「とーちゃんがいっぱい休みの時みたいに家で遊びたい!」と言ってくれる! その言葉を聞いて、いろいろあった1年間で良かったんだと実感できる。父親が育児休業を取ることの弊害や難しさも感じた1年であったが、今までの人生の中で最も輝いていた1年間だったと胸を張って言える。そして、3人目の子供が誕生することになれば、新たな「初めてに遭遇」するために、子供の成長を見るために、そして、父親の育児協力が得られるかの質問に素直に答えてもらえるように、育児休業を再取得したいと考えている。



執筆者の横顔：

県立高校教諭 約60人 30代前半
30代前半 本人・妻・子2人(女児2人)
平成18年4月～19年3月(1年間)



4-07 泣くことでしか意思表示ができない赤ちゃんの心にじっくり耳を傾ける、そんな大切さを再認識

新米おとうちゃんの育児奮闘記

奥 博史 さん

平成 16 年正月、第一子の娘が誕生しました。当時、産業カウンセラーの勉強を始めていた私は、乳児期からの親子のスキンシップが大切と感じていました。妻は期間雇用での育児休業中で、産後復職して 3 月末の任期までは続けて欲しいと思いました。たまたま手にした厚生労働省の広報パンフレットで、パイヤ鈴木さんの「パパ！（育児が）イヤなんて許されませんよ。育児休業をとりましよう、お父さん。」という文言が琴線に触れました。私自身、育児はやってみたいし、2 カ月くらいならできるだろう、やってみる価値があるぞと奮い立ち、育児休業を決意しました。

幸い私の仕事は、企画業務で裁量が与えられ、年度目標はほぼクリアできそうな状況でしたので、すんなり職場の上司、同僚の理解と協力が得られました。代替アルバイトも雇われることとなり、休業前に最大限事務処理をこなして引き継ぎ、妻が産後復職した 2 月から 3 月にかけての 2 カ月間、育児休業を取りました。

実際育児休業中は、生後間もないわが娘に てんてこ舞いの毎日でした。朝、妻を見送つてからは、泣かれるたびにミルクか？ おむつか？ それとも眠いのか？ と右往左往、育児本が頼りでした。そして、時間間隔や吸飲量を気にしながらミルクを調整し、飲めば背中叩いてゲップを出させること、おむつを替えること、わが娘の細い首根っこを親指と中指でしっかり持って沐浴することが私の日課となりました。本当に 1 日中気が休まる暇がなく、夕方、妻の帰りでほっとしたことが、しみじみ思い出されます。

また、妻が日中職場でうとうとしないように夜も私が担当しました。初めの頃は、「早くねんねしてよ～」とあやしても、わが娘の目はパッチリ。焦れば焦るほどわんわん大声で泣かれる始末。「いい加減に泣きやんで寝ろよ！」と叫びたくなる気持ちをぐっところえ、必死にあやしました。そのうちに私自身が忍耐強くなり、「赤ちゃんは泣くのが仕事」と気持ちに余裕が出てくると、あやしてもすんなり泣き止み、ねんねするようになりまし



た。「そうか～赤ちゃんはそばにいるという安心感が欲しくて泣く時もあるのか」とふと気づきました。なにか勘どころを押さえた感じで、なぜ泣いているのかがある程度わかるようになり、育児が楽しくなってきました。

そして、育児を通して、泣くことでしか意思表示ができない赤ちゃんの心（泣く意味）にじっくり耳を傾けることをわが娘から学びました。まさにカウンセリングと同じで、相手の気持ちに寄り添うこと、決してスキルだけでなく態度の大切さを再認識しました。また、24時間エンドレスの子育てのしんどさも痛感し、育児も人生での立派な「キャリア」

と感じました。

復職後は、自分の時間がやっと持てたという解放感を味わい、正直ほっとしました。しかし、妻の日中の心労を考え、なるだけ就業時間に効率よく仕事をこなし、さっさと我が家へ子育てに早く帰るようになりました。帰ってからは、あくせく仕事モードからゆっくり育児ペースに切り変えて、のんびりと娘と過ごしています。

子育てに少しでも興味があり、職場環境が整っているお父さん。長い職業人生、たとえ産後1週間でも職場から離れて、育児休業してみることをお勧めします。



執筆者の横顔：

団体職員 0～99人 40代前半 30代後半
 本人・妻・子1人(女児 4歳8ヵ月)
 平成16年2月～3月(2ヵ月間)



4-08 出産前から育児休業を計画。健康バロメーターである排泄物を観察

男の育児休業の勧め

岸本 大助 さん

[環境]

育児休業取得計画は、長男が妻のおなかに入った時から始めました。会社員・中小の自営業の友人に話すと「会社クビになるよ」「そんなん、取りたくてもとれんわ」と問題外の返事が返ってきます。「産休と育休」の区別が、社会では、まだまだ認識されていないのが実情です。

[収入]

お金がないと生活ができません。妻は、もう一人子供が欲しいと考え、正社員ではなく、パート就業をしています。社内の就業規則、育児休業制度とにらめっこし、育児休業給付金申請は会社に出向き手続き、児童手当は直接市役所に出向かなくてもはいけません。自宅手続きで、簡素化できればと思います。子供にかかる費用・社会保険料を確定申告で自営業者のように控除対象にさせていただきたいと思います。

[生活]

リズムが崩れがちになるので、起床時刻は仕事のとくと変えていません。洗濯はプロになります。雨の日に洗濯を平均 6kg しても、夕方までには仕上げます。子供と二人きりですとストレスが溜まりやすいので、交流の場が必要だと感じました。

[衣・食・住]

オムツ等を購入していた近所の卸屋の閉店がショックでした。衣料はできるだけ日本製を購入。なぜなら日本人に雇用が生まれるからです。離乳食は、親として安全な国産品を食べて欲しいため、アミノ酸・ブドウ糖加糖液等・炭水化物分解物の入った調味料、レトルト等のケミカル食品を台所から排除しました。必ず表記を読み、台所にない食品添加物は避けたほうが昨今の事件もあり、無難だと思います。部屋のレイアウトは、床が硬いので、敷布団を敷き、ダンボールに本を入れて城壁にしています。

[健康]

うんこは健康のバロメーターなので、観察しています。突発性発疹後、食事で自我の目覚めがありました。今は手づかみで海苔巻きを食べています。冷却用ジェルシート・防水体温計は常備品になります。

[設備]

百貨店や大型スーパーには授乳室が設置されています。授乳させようとドアを開けるとお母さんばかりで、変な目で見られました。オムツを交換したくても、男性のトイレには交換用のベッドはありません。男性が育児できる設備が必要だと強く感じました。

[復帰]

育児休業取得は、ひとつの資格取得に匹敵することがと思います。復帰直前は新しい職場と体の慣らしに不安が出ますが、子供の笑顔が忘れさせてくれます。復帰後は病児保育が心配です。保育料が高いし、施設が少ないからです。

[普及]

現在の次男誕生までには、さまざまな困難がありました。不妊治療で授かった長男は予定日直前に死産でした。人生、足腰が弱くなるまで残り31年だと考えると、育児休業で貴重な時間が過ごせました。

「男性育休、マイナーからメジャーへ昇格を！」

執筆者の横顔：

30代後半 平成19年1月～8月(7ヵ月間)





4-09 2回の育児休業を取得。子・親、保育園の友達と親、そして先生とのつながりができた

ステキな育休ライフ

北村 俊幸 さん

2回。私が育児休業を取得した回数です。最初は、03年の9月から1カ月間。2回目は、06年の10月から1カ月間。1回目は上の男の子で、生後3カ月の頃、2回目は下の女の子で、生後1カ月の頃でした。いずれも、離乳食ではなく、ミルクの時ですね。

仕事は営業の間接部門で、03年当時で入社5年目でした。間接部門ということもあり、仕事の都合をつけやすかったので、育休を取得しやすい環境でした。

そもそも、私がなぜ育児休業を取得したのかですが、大学時代まで遡ります。育休を取得したお父さんの日記集を読んだことがきっかけです。育休を初めて知り、ワクワクしました。いつか絶対取りたいと思ったものです。子どもが好きということもありますし、まだ取得している人が少ないことも、私の心をくすぐりました。育児はその時にしかできないんです。特に生まれてから1年くらいの間、こんな成長する時期を見逃すのはもったいないですよ。

で、会社に入り5年めにして、チャンスがめぐってきました。予想通り、会社で育休を

取得した男性は、ゼロ。最初に周囲に取得すると言った時に、最も印象的だったのは、会社の反応でした。育休の申請方法について尋ねた時です。

「どのような手続きが必要なのですか。」
「奥さんの勤め先に聞いてください。」

育休が、いかに女性の制度なのかが、よく分かりました。休業期間が1カ月ということもあり、業務の引継ぎは、スムーズでした。引継ぎが急に必要になるのではなく、休業までの時間が多くあるのも、育休のメリットではないかなと思います。もちろん、職場の理解があればこそです。中でも、上司が協力的だったのには、助かりました。上司の言葉。

「長期で休めることは、めったにないことだから、一度仕事から離れるのは悪いことじゃない。必ず得るものがあるはず。」

いい人にめぐり合えたなと思えました。しかし、上司や同僚の協力がありながらも、不安なこともありました。自分がいなくとも、業務が円滑に進んでしまうことです。自分が必要とされていないようで、寂しい感じでした。

人から必要とされることは大切なんですね。

というわけで、仕事では、障害となるものがほぼなかったわけですが、一つだけ問題がありました。お金です。収入が減るのはきつかったです。これには、以前から貯金するしかなかったですね。

そうそう、育休への妻の反応ですが、

「いいよ」

の一言でした。さすが、妻。こちらの性格を熟知している。

さて、実際の育休中ですが、「しあわせ」の一言につきます。ただし、想像よりも、まったくとした1日が待っていました。ミルク、おむつ、あやす、寝る、起きるの繰り返しです。時間の余裕はないです。でも、子どもの寝顔を見ると、「あーしあわせだな」という気分になれるんです。ただ、一つだけ辛かったことは、夕方に突然泣き始め、何をしても泣き止まなくなる時でした。あやしなながら、じつと耐えるしかなかったのですが、自分の思い通りにならないことがこんなにもきついことなのかと実感できました。

一方、下の子の時にきつかったのは、私が育休中に、妻の論文提出があったことです。子どもが寝たら、妻のフォローをし、無事に妻も卒業できました。少しは役に立ったかな。

復帰後の仕事への影響ですが、時間を大切にするようになりました。保育園の送り迎えが毎日ではないけれども、あります。限られた時間をどう使うか。無駄な仕事なら、なくせないか、常に考えるようになりました。

子どもとの関係で言えば、下の子の育休中には、上の子を保育園へ毎日送り迎えに行くことで、他の園児の親御さんと仲良くなれましたし、園児からも「～くんのお父さんだ」と言われるくらいになりました。子、親、園の友達、園の友達の親、園の先生という複雑なつながりができて、子どもに関われるようになったのは良かったかなと思います。

以上、私の経験が、少しでも役に立てば幸いです。



執筆者の横顔：

会社員 1,000人～4,999人 30代前半
20代後半 本人・妻・子2人(男児1人、女児1人)
平成15年9月～10月(1ヵ月間)



4-10 育休取得により父親っ子に。妻にも嫉妬し、嬉しいやら申し訳ないやら複雑な毎日

あたしのおとうさん！

熊谷 和俊 さん

「ビエー、ビエー」と、いきなり静寂を裂く赤ちゃんの泣き声。あれ？ 腕のなかの赤ちゃんは笑っている……。

この夏、妻の友人らと食事会をしました。みんな子連れで、生後9カ月の赤ちゃんも一緒でした。娘の乳児期を思い出し、妻と私と赤ちゃんを抱かせてもらうことになりました。まだ小さくて可愛らしい赤ちゃん、約1年半前娘が誕生した頃を思い出しました。抱っこしてあやしていると、突然、辺り一面に響く赤ちゃんの泣き声。「ビエー、ビエー」、それも相当すごい声で、お腹から声を出して泣いている。でも、私が抱いている赤ちゃんは笑顔、あれ？ と後ろを振り返ったところ、なんと「他の子抱いちやダメー！ お父さんはあたしの！ あたしだけの！」と言わんばかりに、娘が私のズボンを引っ張りながら、泣き叫んでいるじゃありませんか、どうして？ 妻が赤ちゃんを抱いた時には、なんの反応も示さなかったのに、私が赤ちゃんを抱いただけで……、娘の嫉妬です。周りは、ビックリして目がまん丸、母親に対して子供が嫉妬をする光景は良く目にするそうですが、父親のケースはなかなか見ないとのことでした。

娘が父親っ子になってしまったのは、私の

育児休業取得が影響大の様です。取得を決意したのは、妻の育児休業終了が間近で職場復帰が迫っていき、入園希望の保育園についても空席が無く、妻の復帰日までに入園が困難な状態にあったのです。つまり、保育園の入園が可能となるまで、妻か私、夫婦のどちらかが娘の面倒を引き続き見なくてはならなくなりました。

夫婦で話し合う日々が続きました。「育休を延長しようか？」という妻に、私は本当は、育児によるストレスが相当溜まってきていることを感じていました。我が子とはいえ、意思の疎通が図れない相手と2人きりで過ごすことは想像以上に大変なこと。現に、育児ストレスによる子への虐待、子殺しといった痛ましい事件が相次ぐ時代です。そんな時、かねてより男性の育児休業に関心のあった私は「自分が取得するよ？」と提案したのです。妻は驚きと安堵の表情を見せつつ、不安げに言いました「大丈夫？ 申請できる？」この言葉の裏には、日本ではまだまだ育児は女性の仕事、子供の送迎のために遅刻・早退するなんてもつてのほか、まして男性が育児休業を取るなんて……、といった現状がありました。

実際その妻の不安が現実のものとなります。当初、なかなか職場の理解が得られず、

「何で男が育児休業を取るの？ 君が見なきゃだめなの？」「土・日に一緒にいられるじゃないの。それじゃ足りないの？」「そんなに四六時中一緒に居て楽しいの？」「保育園（どこか預けるところ）には入れられないの？」等の厳しい言葉が降り注がれました。そんな時は、断念した方が良くはないかと考えたこともありました。妻の応援もあり、根気よく職場関係者と話し合いを続け、結果的に育児休業を取得出来ることになりました。

そして、ついに育児休業突入！ いざ娘と2人きりになると何事にも「？」が付いていました。相手は1歳3ヵ月、言葉で意志を伝える事の出来ない赤ちゃん、どんなメッセージを発しているのか、日々、娘を眺めながらの情報収集でした。当初は、泣いていれば、なんで？ お腹が空いた？ ウンチ？ オシッコ？ 暑いのか？ 寒いのか？ 等頭を悩まされることばかりでしたが、そのうち「あ、お腹が空いたんだな」「そろそろウンチかな」と赤ちゃんが欲することが理解出来るようになりました（分かった気になっていただけかもしれませんが……）。

悩み事も心配事も絶えませんでした。嬉しいことも盛り沢山でした。日々の成長、体重計の数値が増えていく時、手の届かなかった所に軽々と届いた時、髪の毛が増え結べるようになった時（髪の毛が少なかったので、

よく男の子に間違われました）、肌で成長を感じる事ができ、とても幸せでした。もちろん、私の食事の栄養バランスがいいから、娘が成長しているんだという、身勝手な自負もありましたが、それでも、昨日まで食べていた物を急に食べなくなったり、食事を少ししか食べず残してしまったりした時などは、気が気でなく育児書を読みあさったり、妻にメールしたりで、大騒ぎでした。そんな時、新米父親を露呈していました。

育児のことについては、限りなくお話ししたいことがあるのですが、最後に、私は家庭中心の生活をしているのですが、欧米では男性の育児休業取得や育児への参加はもちろん、普段より家庭のこと家族のことを率先して行っていると聞きます。そのように家庭中心の男性が日本でも欧米並みに増えてもいいのではないのでしょうか？ 妻にさえも嫉妬する子供をみるのもいいもんですよ！

今は、私にべっぴんの娘。思春期までか、幸運にもそれ以降も続くか分かりませんが、しばらくはラブラブな父娘生活を楽しませてもらうと思っています。



執筆者の横顔：

公務員 40代後半 40代後半
平成20年1月～4月(4ヵ月間)



4-11 子ども達との料理作りで事件勃発。笑顔で頑張る妻に感動。育児・育自はこれからが正念場

夫が父に変わるとき - 2回目のプロポーズ -

斎藤 仁丸 さん

「僕は今、タクシーに乗っている。『早く！急いでくれ！』心の中で叫ぶ。仕事で東京に泊っていた僕の携帯に深夜、病院へ向うとの妻からのメッセージが入っていた。命がけの出産の場に向おうとする妻。どういう思いで電話をくれたのか。どうして電話を取れなかったのか。どうして昨夜のうちに自宅のつくば（茨城県）へ帰らなかったのか。自問と後悔の言葉が頭をよぎる。携帯が、鳴った……。

『無事、生まれました。女の子です。』

3人目は念願の女の子だ！という感激と妻のさびしそうな顔が同時に頭に浮かび、5分の車中がやけにゆっくり感じられた。――」

コミュニケーションを大切にする社風があったので、冒頭の事件からすぐ上司や人事に相談に行きました。その中で一本の道が。それは「男性の育児休業」。その頃、僕はビッグプロジェクトの技術リーダーを任され、モーレッツ社員の先頭を切ってバリバリ仕事をしていました。その陰で妻は仕事を辞め、長男、次男を育て、義祖母の介護をこなし、妻

自身のキャリアへの不安を抱えながらの毎日を送っていました。ある晩、何かが僕の背中をちょっと押してくれました。

「僕が育休を取ろう！」

プロポーズ。2回目かな？

育休パパの先輩も見つからず、人事手続きにも時間を要しましたが、民間企業では異例の平成15年10月から1年半という長期の育児休業が認められました。

準備もそこそこに、育休と言う名の無休、無給の日々が始まりました。つくばは車社会なので、娘の授乳に妻の職場へ、上2人の幼稚園の送迎と1日に百キロ近く走る日が続きました。ペーパードライバーだったのに……。

ベテラン保育ママさんの協力を得て上2人と遊ぶ時間も沢山取りました。仕事や新聞と切り離された充実した時間に一女性のように身体的変化こそありませんが一何か確実に変化する自分を発見しました。パパお出かけの時「また来てね～」とは言われなくなったし。育休後半。パン作りを皮切りに子供達との

料理に味をしめたパパは餃子作りを計画しました。上2人は野菜切りの大事な戦力。ところが相次ぐ流血騒ぎ（ちょびつとですが）。娘はもらい泣き。時計の針だけは絶好調。そして妻の「ただいま～」のご機嫌な声。餃子になると思われる具と皮を見つめる妻。沈黙。餃子の皮ならぬ暗黒に包まれていく我家……。

その時、妻が光を照らしてくれました。笑顔に切替え腕まくり。パパのこねた皮に子供達の具をママが包んで、最高に美味しい餃子が出来ました。仕事で疲れているのに「もう一歩」。笑顔で頑張る妻に感動しました。夫が育休を取っているのが仕事上プレッシャーになっているはずです。諸々を飲み込んで前に進む妻の覚悟。頭が下がります。う～ん、ビールが美味しい！

ところで、成功したチャレンジも勿論あります。幼稚園バザー用手芸品作り、上2人

の勉強机DIY、わらべ歌と子守歌のレパートリー百曲、中高一貫校でのスポーツ講演会 etc。地域活動にも参加出来ました。

何と言っても制度に恵まれ、帰る港が確保されていたお陰で充実した1年半を送る事が出来ました。職場復帰時の技術ブランクも、育休中に通った研究会での個人情報保護法のノウハウでトレードしました。復帰1年後には昇進も果たし「男性が育休を取った成果で」とスピーチしたところ、お世話になった方々皆笑顔を見せて下さいました。これからも職場、家庭、地域のバランスを大切に、育休パパとして得た経験を活かして頑張りたいと思います。育児、育自はこれからが正念場ですから。

お父さんたち！ 育休パパ7つ道具の1つ「軍手」を持って一緒に園、学校、地域活動に出かけてみませんか？

執筆者の横顔：

会社員 5,000人～ 30代後半
 本人・妻・子3人(男児2人、女児1人)
 平成15年10月～17年3月(1年6ヵ月間)
 第三子(女児(5月生))の時に取得
 勤務先独自の制度で1年6ヵ月間の取得が可能





4-12 日々の何気ないしぐさ一つひとつに立ち会えたことは、まさに子育ての醍醐味

短期間でも取得できる育児休業

坂下 和広 さん

平成 18 年 1 月 1 日、新年の幕明けを祝うようなきれいな日の出とともに、立会い出産のもと、第 1 子目の赤ちゃんが誕生しました。産まれて間もなくだというのに、パッチリとしたその流れるような目は、父の寝不足顔を食い入るように見ていました。3000g で産まれた我が子を初めて抱っこしたあの時、自分が取得しようと思った育児休業が素晴らしい時間と経験を与えてくれることになるとは、想像もつきませんでした。

私は妻が専業主婦でありながら、2 週間ほど育児休業を取得しました。皆さんは『妻が専業主婦の場合、育児休業を取得できるのか?』と疑問に思うことでしょうか、制度上認められているケースなのです。その疑問こそが、取得を意識したきっかけです。妻は出産間近まで働いて退職、出産後専業主婦になる。どうしたら一緒に子育てできる時間が取れるのだろうか。そこで、職場で定めている「次世代育成支援行動計画」について調べてみました。「配偶者が出産日前 8 週間から出産日後 8 週間の期間の男性職員」とあったのですが、片方の親が働いていなければ取得できないという固定観念が強かったため、自分の解釈が正しいのか不安になりました。担当者に聞いてみると、あっさりと「取得でき

るよ」という答えが返ってきました。

妻に話したところ、共有できる時間があれば何かと支え合えるよねと喜んでくれました。出産後は実家に戻るので、自宅で生活する産後 8 週の後半 4 週の期間を取得してみよう話し合いました。『たとえ 1 カ月であっても、こどもの成長をこの目で見るとともに、子育てへの参加がどこまでできるのか実践してみたい』その思いを胸に職場の上司・同僚に伝えました。男性初の取得に加え、当時福祉の部署に勤務していたこともあり、『この部署で取れないのなら、どこの部署で取れるの?』という嬉しい言葉をかけて頂きました。職場の仲間の「理解」という支援がなければ、取得には至りませんでしたね。収入・支出面についても担当者と相談し、配偶者出産休暇や男性の育児休業などの特別休暇を使用して休業期間を 2 週間ほどとして取得するようになりました。

育児休業中の役割は、お風呂、布おむつや衣服の洗濯、寝かしつけなどです。一緒にいることで、ちょっとしたサインにも気付きました。縦抱きじゃないとぐずる、声をあげないあくびは眠い時に必ずする。何気ないしぐさ一つひとつに立ち会えたこと、何を要求しているのかを肌で感じられたことが、子育

て中の醍醐味でした。大変だったのは授乳です。取得期間中に望んでいた、妻が外出し子どもとふたりきりの時間を持った時のことです。母乳を冷凍して保存しておいたのですが、人肌に温めてからでないと飲ませられないので、準備に時間がかかってしまう。妻から目安として3時間間隔と聞いていたので、頃合をみてやってみたものの……涙を流しながら泣く姿には、ただ「ごめんね」としか言えませんでした。でも、お腹が満たされればとびきりの笑顔に変わるので、時間も忘れて一緒になって笑っていました。

子どもを中心とした生活に一変しましたが、子どもだけに目を向ければよいのではないとも感じました。妻への気配りというか、フォローも必要だなと。妊娠から出産を通して、産後の母体はホルモンのバランスも変わり、たいへんな時期となります。短い時間の間隔で授乳させる母親の生活は一変し、睡眠時間だって削られます。そんな時は父親の出

番だと思いました。母親は、家にいるだけで何にもしていないわけじゃありません。常に子どもに気を配っています。家事などの分担をして協力することにより、お互いの心に余裕が生まれ、子どもと触れ合う時間を持つことができるのです。

今では二児の父にもなり、取得した時の子育て経験が生きていると実感しますね。取得後は、男性職員と子育てについて話をすれば花が咲き、ママ友ならぬパパ友としてのネットワークが広がりました。育児休業を通して子どもと過ごす時間の大切さ、楽しさ、命のすばらしさに触れることができたのは、かけがえのない財産であると感じています。長い期間だけではない、夫婦一緒に子育てができる僕が取得したようなスタイルもありますので、これから取得をめざしている方にむけて少しでも参考になれば幸いです。楽しい育児休業ライフが待っていますよ！



執筆者の横顔：

地方公務員 30代前半 20代後半
平成18年2月(2週間)



4-13 育児休業により、知っていた「情報」が「リアル」になって視野が拡大。「育休はためになる」

育休はメリット満載

佐藤 英之 さん

もう、7年も前のハナシで恐縮です。たった3か月のあいだでしたが、ぼくは育休を取得しました。

育休を取得したころは、「きっかけは何？」といった質問をよくいただきました。でも、ぼくの場合、そんなのなかったんです。ぼくは地方公共団体の職員でして、妻とはいわゆる職場結婚でした。おまけに同期どうし。当然、給与から何からイーブンです。なので、結婚当初から、「家事はできるほうがする」が暗黙のルールでした。そんな夫婦にとっては、「育休も半分ずつ」という発想は極めて自然だったわけです。

とは言え、ぼくが育休を取得することができた背景として、いくつかの環境的な条件が整っていたことは否定できません。

その一。まずは、ぼくが公務員であったこと。というのは、民間の方にうかがうと、育休を取得するにあたっては、いろいろな障壁があるらしいからです。例えば「昇進に響く」だったり、「会社がまわらない」だったり、様々です。法の規定どおり権利保障されることが

実際は困難なことなのだと思うと、自分の置かれた環境に感謝せざるを得ません。ちょっと釈然としませんが。

その二。つぎに、夫婦が性的役割にとらわれていなかったこと。現実問題として、もしぼくに家事能力がゼロだったら、育休を取得したところで子育ては不可能だったからです。恐らく、子育てしようなんて考えすら浮かばなかったことでしょう。子どもが生まれるまでに、ある程度の家事をこなせるようになっていたことは、案外重要な要素だったと思います。

その三。そして、妻と周囲の理解があったこと。そもそも、妻が職場に復帰せず常に子どもを養育できる状態にあれば、ぼくは育休を取得することができなかつたからです。事実、育休を取得したいと思っている男性が、「妻が譲ってくれなかつた」という理由で、断念せざるを得なかつたという悲話を聞いたことがあります。実は、妻の理解はかなり重要なのです。それから、言うまでもありませんが、職場の同僚たちの理解も必要です。彼

らは笑顔で激励してくれましたから、本当にありがたかったです。

そんなこんなで、ぼくは育休を取得することができました。そのときの感想を一言で申し上げるなら、「育休はためになる」です。

とにかく育休をとおして、情報としては知っていたことが「リアル」になって視野が広がったと思います。例えば……

- ・子どもと二人きりという緊密な人間関係がキツかったこと。
- ・自分が収入を得られないことに対して負い目を感じてしまったこと。
- ・子どもの健康状態や発達状態について不安でしかたなかったこと。

そして、育休をとおして子どもと正面から向き合うことで、子どもとの関係性の基礎を築けたと思います。例えば……

- ・自分が子育ての主体だと再認識したこと。
- ・理屈だけではコミュニケーションが成立し

ないと学習したこと。

- ・自分と子どもがそれぞれ別個の人格を有すると痛感したこと。

このように、ぼく的には、育休はメリット満載の制度でした。当初は、仕事から離れることに不安がありましたが、逆に距離を置くことで、仕事に対して客観性や冷静さが身に付くという収穫もありましたし。

ただ、誤解していただきたくないのは、ぼくは「男性も育休を取得しましょう！」と申し上げているわけではありません。正直、そんなの、男性だろうが女性だろうがどっちでもいいです。大切なのは、それぞれの夫婦が、それぞれの環境のなかで、子育てについて話し合い、最適な結論を導き出すことです。なぜなら、夫婦が納得したうえで楽しく子育てすることができたなら、それこそが、子どもにとっても居心地のいい家庭の条件になるはずですから。



執筆者の横顔：

公務員 1,000人～4,999人 40代前半
30代前半 本人・妻・子・母
平成13年11月～14年1月(3ヵ月間)



4-14 手作りの離乳食をおいしそうに食べてくれた時は報われた瞬間。公園ではほろ苦デビュー

理想と現実の間で

鈴木 祐之 さん

なぜ育児休業を取得したのかと問われたら「運命だったから」、そう私は答える。自然とそう思えるような条件が偶然にも揃っていたからだ。①妻からの提案であり理解があった、②祖母・曾祖母の協力が得られる環境にあった、③引越しに伴ない妻は初めての土地で暮らす・仕事が変わるといふ二重のストレスをサポートできるのではと考えた、④自分の仕事のきりがつきそうだった、といった条件と「自分ならできる」といふなんの根拠もない自信に加え、育児の合間に自由な時間が手に入るだろうという不純な動機が多分にあった事は否定しない。

会社の中では男性の育児休業取得の前例はなく、育児休業を支援するような独自の制度もない。上司等も突然の申し出に対応に窮しているようだった。強い反対があった訳ではないが、歓迎もされなかった。一方で自分達の両親の反応は協力的で、賛同してもらえた事は本当に恵まれていた。こうして私は育児の神に試されるが如く、怒涛の育児休業生活をスタートさせた。

実際の育児は当初の想像とはかけ離れた過酷なものだった。とにかく手が掛かる、目が離せない、よく泣く。時間ができても何かを行う気力を持たせない。育児とはこうもハー

ドなものなのかという現実を突きつけられた。せめてもの救いは、午前午後2時間ずつの1日2回昼寝をしてくれた事だ。しかしそのせつかな自由な時間も疲れ果てた私は息子と一緒に寝てしまった。なにしろ夜中に2～3時間毎に起きる生活は初めてであり、寝不足との戦いが育児の最大の敵であると感じた。育児休業取得前は、息子が夜中に泣いても気付かずに寝ていた。取得後は真っ先に起きて対応するようになった事を妻に褒められた。それだけ私の体は徐々に育児体質の体に変化していった。離乳食を作る事にも苦心した。当初出来合いのベビーフードを中心に与えた私を妻は随分責めた。妻にしても様々な事が新しくなり余裕がなかった為であったと思う。理解は誰よりもあったはずなのに、人間余裕がなくなれば優しくなれない。私も慣れない育児に奮闘するあまり余裕がなく、我が家は険悪な雰囲気となり、悪循環に陥ってしまった。3カ月を過ぎた頃から、私も育児に慣れ、妻も新しい生活に慣れお互い余裕を持って生活できるようになった。手作りの離乳食を息子がおいしそうに食べてくれた時は本当に報われたと感じる瞬間だった。しかし公園デビューはほろ苦いものだった。平日の公園はママばかりであり、その輪に入れず、



ママ達もこちらを警戒しているのか声を掛けてはくれない。また行政が主催する育児サロンのようなものにも積極的に参加した。男性が真剣に育児をしている姿を示す事、そしてその存在を周知させる事もまた自分の使命であると考えたからだ。そうした場では授乳を行うママもいるのだが、特に授乳室のような場が用意してあるとは限らず、自分の居場所に困ることもあった。公共の施設においても、すべての男子トイレにオムツを替える台が必ずしも用意されていないという現状もあった。

育児休業を終え、異動により取得前とは異なる場に復職した。出来る限り育児に参加できるように、引き続き残業はあまりできない旨を自然とお願いしている自分がいた。職場の対応は意外にも協力的であり、最大限に考慮してくれた。息子は今では私がいないと「パ

パは？」と探し、私の姿を見つけると喜ぶ。息子とは育児休業を取得した事で関係がより深まったと自負している。されど母の存在は強し。本当に追い込まれた時、息子の口から出る言葉は「ママ、ママ」。いまだに母乳を求める息子にとって、その存在はやはり特別大きいようだが、同性である息子はきっと素直じゃないだけなんだと、一人納得しておくでしょう。

様々な好条件を重ねて立ち向かわねば、現時点での男性の育児休業取得という難題は乗り越える事がひどく困難である。しかしそこから得られる稀少な経験を手に入れる事は夫婦共同での育児という観点からは絶対に必要であると考えた。なにしろ、ここまでして身を呈して体感しなければ、家事や育児をする事の偉大さなど男に分かる訳もないのだから。



執筆者の横顔：

会社員 5,000人～ 20代後半 20代後半
 本人・妻・子1人(男児1人)
 平成19年4月～20年2月(11ヵ月間)



4-15 育児を楽しむためには心のゆとりが大切。周りのお母さん達にたくさん支えられ、助けられた

育児は助け合って

瀬戸 誠さん

「奥さんの具合でも悪いの？」

4月当初、私が1歳になる娘をベビーカーに乗せ、3歳の息子の手を引いて幼稚園に送っていく姿を見て、近所のお年寄りが気の毒そうに僕に話し掛けてきた。私は、「いえ、僕が一年間の育児休業を取ったんですよ。」と答えた。

「へえ、男の人が。今じゃあいい制度があるものだねえ。そういう権利は、どんどん行使していきなよ。」

始めは、日中から幼い2人の子どもを連れて散歩をする自分の姿を想像すると、何か悪いことでもしているような気分にもなったが、地域の方と挨拶を交わし、会話を重ねるうちに、次第に「僕は子育てを楽しんでいます。」という気持ちで堂々と歩けるようになった。

私は、小学校教員として6年間勤めてきたが、妻が2人目の子どもを妊娠したとき、育児休業を取得したいと考えるようになった。

男性の育児休業制度は、女性の社会参加を助ける意味合いのことを言われたりするが、私の場合、自分のために得したという気持ち

が強い。確かに、妻が「仕事に戻りたい。」と言ったこともあったが、私自身が、日々の忙しさを理由に、教員という子どもの成長を支援し、見守る立場でありながら、自分の子どもたちの成長もじっくりと見届けられていない現状に不満・矛盾を感じていた。息子が生まれたとき、毎日一緒に風呂に入ろう、夕食を食べよう、寝る前は絵本を読んでやろうと意気揚々としていたが、朝は7時の出勤、帰りは夜8時を回り、帰宅したときには子どもは眠っていたということはよくあった。

それが父親というものだと言ってしまうはそれまでだが、私は、ゆとりある時間の中で子どもと密接に関わることをしたかった。それが結果的に、自分の子どもとの深い関係の構築につながり、教員としての質も高まるのではないかと思った。

仕事を離れて自分の子どもたちと共に過ごす日々は、しばらく感じたことのなかった時間のゆとりをもって始まった。おむすびを握って花見に出掛けたり、庭に畑を作ったり、お菓子を作ったりと子ども達と楽しいことを

たくさんしてきた。

しかし、育児は楽しいだけでは終わらない。幼稚園に入園した息子は、父子分離ができず、私は1歳の娘と一緒に一カ月間、いつまでも幼稚園に残り、頭を悩まされた。また、子どもたちはよく病気や怪我をする。幾度か病院の救急にも掛かり、不安な思いになった。1歳の娘がなぜ泣いているのか、なぜ怒っているのか分からないときは、誰かに助けてもらいたくなるが、自分が何とかしなければいけない。その上、慣れない家事にも追われる。

その状況を分かってくれている妻は、仕事で疲れていても、家事を分担してくれるし、子どもの世話も最大限にしてくれる。そのおかげで、子育ての苦勞も子どもの成長を見られるという充実感となった。

私は育児休業中に親としていろいろな経験をしたいと思い、息子の幼稚園では、幾つかのPTAサークルにお母さん達に混ざって参加をしている。その中で感じているのは、お

母さんたちは、一人で抱えてしまいがちな育児の悩みや不安を互いに相談し合い、互いに助け合っているということである。私自身も家事や育児の悩みについて話を聞いてもらい、幼稚園で会うお母さん達に、たくさん支えられ、助けられている。

育児の楽しいところは、子ども達の発育・成長を最も身近なところで感じられるところである。しかし、それは、心のゆとりがなくては楽しみや喜びとして感じられないこともある。その心のゆとりは、周りの人たちとのつながりや助けによって得られるものだと感じている。

また、子どもがいる家庭で、一人で仕事と家庭のどちらも手を抜かずにこなしていくのは、とても大変なことだと思う。しかし、夫婦が互いの立場を尊重し、育児や家事も助け合っていけば、家族を大切にしながら、互いの自己実現に向かっていくことも可能だと思っている。



執筆者の横顔：

公務員 0～99人 20代後半 20代後半
本人・妻・子2人(男児1人(4歳)、女児1人(1歳))
平成20年4月～21年3月(1年間)



4-16 完璧でなくとも家事、育児に協力する。育児は習うより実践で覚えていく

育児休業取得しての家庭での取り組み

高野 正英 さん

私は、高齢者である利用者一人ひとりの自己決定を尊重し、「明るく生きよう」と思う気持ちを引き出せる福祉を理想とし、社会福祉士の資格を目指しながら、平成十三年四月に介助員として介護施設に入職しました。

介護現場ではシフト制で、慣れるまで一苦労でした。入居者との関わりや、仕事仲間との連携、介護知識や技術を習得できるまでの道のりはとても大変なものでした。ようやく仕事に余裕がもてるようになって、五年目を迎える年の平成十八年二月に結婚し、平成十九年六月二十七日に息子が誕生しました。

職場においても男性が育児休業が取得できるようになって、まもなく私はこの制度を利

用して我が子の育児に参加してみようと決意しました。職場では男性職員として初めての育児休業取得となりました。同時に同僚に負担を掛けてしまうという負い目はあったものの社会的にも「男性の子育て参加の支援・促進を図る」ことがテーマとしてあげられていることから決意しました。

育児休業を取得して一番に実感したのは、もっと男性が積極的に育休を取得すべきだということです。なぜならば育児の大変さと家庭での仕事の多さを知る良い機会となったからです。毎日やるべき大切なことは、息子に数時間おきにミルクを飲ませ、オムツをこまめに交換し、更に家の掃除・洗濯・夕食の準





備などであり、沢山の日常の作業に追われました。

仕事が老人介護なので、家事などは手が付けられない事もなかったけれども、決して自分は全てを完璧にできたとは言えません。例えば、完璧でなくても、家事、育児を協力していくこと、そして育児は習うより実践で覚えていくこと。自分から積極的に育児に関わり妻の負担やストレスを軽減させることが育児休業を取得しての家庭での取り組みでした。

この休業を取得して、とても良い経験になりました。もし再び育児休業を取得できる環境になったら、私は迷わず育休を取得したいと思いました。今までは女性だけが家族の世

話をするのが当たり前の世の中でした。しかしながら女性が社会に進出して平等に仕事をしていく上では男性の協力なくしてはできません。

共働きで生計を立てて行くにはなおさら家庭での役割を分担していくことが賢明です。女性だけに育児を任せるのではなく、共に歩み寄ることで豊かな生活を手に入れることができるのではないのでしょうか。

最後にこの休業を取得し、育児・家事に取り組めたのは、上司の協力があったからこそ、安心して取り組めたことで大変感謝しています。



執筆者の横顔：

介護老人福祉施設介助員 20代後半
20代後半 平成19年10月(1ヵ月間)



4-17 遊びにきた友達と公園で一緒に遊ぶ。子どもの話の中の登場人物も手に取るように分かるように

ジョン・レノンを目指して

高野 通宏 さん

育児休業というと真っ先に思い浮かぶのはジョン・レノンです。ジョンのように「子育てのため5年間休みます」と言いたいところでしたが、仕事面、特に経済面で無理だったので、いろいろと悩んだ結果、第三子の誕生（今年の5月下旬）から約3か月の育児休業を取ることにしました。上司には昨年の冬に相談し快諾していただき、実際の引き継ぎをどうするか時間をかけて検討を行いました。ただし、どうしても引き継ぎが出来ない仕事があり、週1日、短時間出勤することでカバーしました。

第二子の出産時に妻から育休を取るようにおファーを受けたのですが、ちょうど仕事を立て込んでいた時期でなかなか言い出せず、言った時には、「夫が子育てで休む必要性があるのか」と上司に問われ、結局取らず。その後の妻の大変な状態を見てかなり後悔したこともあり、今回の取得となりました。

妻の産後休暇中の取得だったため、産れた子どもの世話は主に妻がして、僕は上の子ども二人（小学校2年の長男と4歳の保育園児の長

女）の世話を主に担当しました。家事分担は、食事作りは僕の担当、洗濯は妻の担当、掃除は二人で、と大まかに決めました。

最初は楽勝と高をくくっていたのですが、保育園に持ってゆく着替えやビニール袋が揃っていない、長男は宿題を忘れる、配付されるプリントを注意して読んでおかないと提出物を忘れて保育士さんや先生に注意されるなど、意外と大変で、毎日の準備でピリピリするママの気持ちが痛いくらい分かりました。また、家事の面でも食器の洗い方が食器洗い器に入れるだけでは汚れが落ちず、妻のダメだしを受けたり、せっかく作った食事が子どもの給食とメニューがだぶっていたり、床磨きをした日に子どもに平然と汚され、子どもを怒鳴って叱ってしまったたり、実際にやってみて初めて分かることが多々ありました。こういった事をする事で妻とは子育てを共に取り組む同志のような気持ちになりました。（妻にとっては頼りない同志でしょうが）

子どもたちの友だち関係が分かったことは、復帰した今でも役立っています。休業中、



自分の子どもだけでなく、子どもの友達にも自分の子どもと同様な接し方をしようと思ひ、遊びにきた友達が挨拶をしないと注意したり、公園で一緒に遊んだりして、積極的に関ったことで名前と顔を覚え、その後、子どもの話の中に出てくる登場人物が手に取るように分かることは、育休を取らないと出来ないことでした。また、それに付随してPTA活動に参加したり、保育園のイモ掘りに参加したりして、親同士のつながりや先生、保育士さんとのつながり、地域とのつながりができたことはその後の生活に潤いをもたらすものでした。

僕の場合3か月という短い期間で、よくいわれる子育ての孤独感も感じない期間でした

が、生まれた子どもは劇的に変化しました。上の子どもとは約5年はなれているので、子どもたちにとっても赤ちゃんの成長を身近に見れたことはよい経験になったと思います。また、親にとっては第一子、第二子の赤ちゃん時代が思い出され、妻とああだった、こうだったとたくさんの会話をしました。僕にたくさんのLOVE&PEACEをもたらした育児休業でした。もっと早く育児休業を取っておけばと後悔もしましたが、この経験を多くの父親にしてほしいと思います。日本版パクオーター制など行政主導で制度化すれば取りやすい制度になるのではと個人的には思います。



執筆者の横顔：

会社員 1,000人～4,999人 30代後半
本人・妻・子3人(男児2人(7歳、0歳)、女児1人(4歳))
平成20年5月～8月(3ヵ月間)



4-18 子どもの目線で生活することで、体いっぱい季節を感じ、思えがけない幸福感を得た

宝物

竹内 康二 さん

息子が1歳2カ月から1歳5カ月までの2カ月半。妻と入れ替わりで育児休業を取得した日々は、私にとって仕事とはまた違った非常に濃密な時間でした。

きっかけは学生時代に遡ります。当時参加した海外でのキャンプで、木に登って木の実をとり、子どもをあやし、小屋まで立ててしまう力強い現地の男性を見て、自分がいかに「生きる力」がないかを痛感し、家事育児の重要性に気づきました。社会人になり、デスクでパソコンとにらめっこする毎日。料理もろくにできず、生きていくための礎がないのに不自由なく暮らしていけてしまう状況に矛盾を感じていました。やがて結婚して子どもを授かり、育休をとりたい、家事育児をみっちりやって、生きる礎を築きたい、と思うようになりました。上司に伝えたのは妻が妊娠5カ月の時。「いいじゃない。応援するよ」と快くOKしてくれました。働くママが社内に多く、理解のある社員が多かったこともあり、順調に進みました。同僚から励ましの言葉を多くかけてもらい、恵まれた環境でした。

妻の妊娠期間を一緒に過ごし、立会い出産を経て、わが子に対する責任感と愛情は増していきました。父親として、子どものこと

くらは責任を持って、全ての面倒を見られるようになりたい。子育ての大変さを感じつつも、育休を取りたい気持ちはますます強くなっていきました。ただ、息子への強い気持ちは、妻も当然持っていました。私の場合は、妻の理解を得るのが一番のハードルでした。はじめは快くOKしてくれたはずでしたが、おなかに宿った時から息子の事を第一に考え、産まれた後も母乳を通して一心同体のような関係を築いてきた妻にとって、息子と離れるのは耐え難い苦痛だったようです。「私たち母子を引き離してまで育休をとるのか」という話し合いが育休に入る直前まで続きました。会社は後任を用意してくれ、引継ぎも残り少し、というところまでできていました。それが、今になって「やっぱり育休とりません」とは、後に続く人のためにも言えません。妻の気持ちは痛いほど分かりましたが、最後は、説得というより、自分のわがまみを認めてもらった形で育休をとらせてもらいました。

そんなこんなでスタートした育休生活。育児は積極的にやってきたつもりだったので、ある程度はこなせましたが、家事をしながら息子をみるのはなかなか大変でした。

「抱っこ！」と甘えてくることも多く、誤



飲や転落など、目が離せない時期。ものさしをトースターでドロドロに溶かされ、リモコンの音量をいじられて童謡がマンション中に響き渡ったこともありましたが、なんとか大きな怪我なく過ごせました。

振り返ると、育休中は結構疲れが溜まっていました。おむつ替え、離乳食作りなど、ひとつ一つの作業は誰でもできます。男性でも、意外と簡単にできます。ただ、簡単なことでも、それを毎日毎日、毎回毎回続けていくのは本当に大変なこと。息子の機嫌が悪い時。体調が悪い時。自分が疲れている時。どんな時も続けていかなければなりません。しかし、日に日に成長していく息子の姿を見ると、大変さを上回る充実感がありました。

また、子どもの目線で生活することで、道に咲く小さな花に気づくようになり、木々の芽吹き、変化する太陽の傾きなど、季節を体

いっぱいを感じられたことが、思いがけない幸福感を与えてくれ、息子の笑顔とともに疲れを癒してくれました。

4月から保育園に預けて職場へ復帰。二人ともひととおりこなせるので、仕事量にあわせて家事育児を分担したり、交代で息抜きしたりでき、多忙な共働き生活を乗り切るための大きなアドバンテージになっています。女性が子育てしながら仕事をするのは、心身両面で想像以上に大変です。お互いが逆の立場に立ったことで、相手の気持ちも分かるようになり、心身両面でサポートしあえることが、男性の育休経験の最大の利点だと思います。

息子とゆっくり、じっくり向き合えた2カ月半。一日一日のめざましい成長を特等席で見ることができた時間は、何十年経っても忘れることのない宝物です。



執筆者の横顔：

会社員(環境保全型会員制宅配業)
100人～299人 20代後半 20代後半
本人・妻・子1人(男児1人)
平成20年2月～4月(3ヵ月間)



4-19 子どもとの2人の時間はゆっくと流れ、気持ちも和やかに

私の育休体験記

匿名

私が育児休業の取得を本気で考え始めたのは、広島県三次市の育児休業の取組に関するテレビ番組を見たときからでした。男性でも育休を取る時代なんだと漠然とそのテレビを見ていました。そんな時に2人目の子供を授かったとわかったものですから、この子の時には育児休業を取ってみようと密かに決心しました。

私は市役所で働いていますが、私の職場は、市役所の中でも冬場に集中的に忙しくなる職場ですので、実際に取得したのは9月と10月の2カ月間でした。9月からの取得でしたが、職場の理解を得るために、その年の3月くらいに上司に育休を取得したい旨を伝えました。また、同じ職場の人たちにも育休をとりたいと話をしました。職場の皆さんは、良いことなのでとってみたらと言ってくれました。私のいない間は育休代替の臨時職員さんが入ってくれるし、やるべきことは前倒してやっていこうということも言ってくれました。具体的には、9月から育休をとるために、通常であれば10月以降に行う仕事を前倒し

して7月から始めました。

次に家族とのやり取りですが、妻の職場の事情で子が1歳になるまで育休をとることができないことはわかっていました。妻には上の子の時には、9カ月で保育園に出しましたが、せっかく1歳までは経済的な手当もあるのだから自分が取ってみようかと話を切り出しました。妻としても仕事に復帰して慣れるまでの間、誰かが家で子どもを見てくれると助かるという思いもあったようで、私が育児休業を取ることに快く賛成してくれました。しかし、賛成はしてくれたものの、妻は、離乳食のことなど色々と心配なことがあったようです。私の両親も心配して手伝いに来ようかと言ってくれましたが、妻が夜勤などの時以外は極力私が1人で世話をするということになりました。

実際育児休業に入ると、オムツの洗濯や離乳食作り、またその他の家事などやるのが盛りだくさんで慣れるまではかなり疲れしました。子どもが寝ている時間しか掃除や洗濯をこなす時間はないわけですが、その頃私の子

どもは抱っこをしていないと目を覚ます状態だったので、ハイハイする我が子を気にしながら掃除や洗濯をするということになってしまいました。これがなかなか難しく、工夫しながら何とか家事と育児をした記憶があります。しかし、そんな中、苦勞をしながらでも育休中は子どもとずっと一緒ですから、つまり立ちが初めてできたり、伝い歩きを初めてしたりといった瞬間を見ることができました。保育園に預けていると、できましたよと報告された後でそれを見ますのでやっぱり感動が全く違います。そんな瞬間を父親の私が見ることができたのはやはり育児休業を取ったおかげなのかなと思っています。

もう一つ感じたことは、仕事をしていると時間があっという間に過ぎてしまいますが、

子どもと2人の時間はゆっくり流れていた気がします。そのゆったりとした時間の中で過ごすことで、私も和やかな気持ちで育休中は過ごせた気がします。子どもの少しの成長を間近で見ることができた幸せは仕事に復帰した今、改めて感じているところです。

最後に、育児休業をとってみて妻の大変さは当然のことながら、保育園の先生の大変さもわかりました。同時に、保育園の先生しか見ることができなかった瞬間を見ることのできたことはとても嬉しく、感動もしました。また、仕事に復帰してからなるべく残業をしないようにと心がけるようにもなりました。次の子がもし産まれたらもう一度、今度はできるだけ長い期間育児休業を取りたいと思っています。



執筆者の横顔：

公務員 300人～999人 20代後半
20代後半 本人・妻・子2人(男児1人、女児1人)
平成19年9月～10月(2ヵ月間)



4-20 地域運営の子育てサロンで悩みを語りあい、苦労を共有することでストレスを発散

子どものいる生活と仕事 - 育児休業を経験して -

千田 博史 さん

夫婦共働きの中、2人とも深夜帰宅が珍しくない環境に身を置き、仕事に没頭する毎日が続いていました。子どもは欲しいと思ってはいましたが、仕事の忙しさもあり、なかなかきっかけが見つかりませんでした。でも、妻の人事異動をきっかけに、少し仕事も落ち着いた頃、妻の妊娠が判明しました。私は相変わらず深夜帰宅が多かったのですが、この機会に妻とことん話し合い、今後のライフプランを立てて出した結論は、お互いに育児休業制度を活用して、働き続けながら子育てをしていくことでした。

それからというもの、妻は産休と育休を前に、職場に迷惑をかけないように仕事を少しずつ整理することを始め、私も育休を取得することを職場の上司や同僚に伝え始めました。幸いにも、職場自体が男性の子育て参加を奨励していたことや、かなり早い段階から周囲に理解を求めていたことで、育休中の増員が人事担当部署に認められ、上司・同僚の負担の軽減にも繋がったことが、よりスムーズな育休取得に結びついたと思います。

人事異動の時期も考え、結果として、妻が産休・育休含め7か月、私が育休を10か月取得することになりました。最初は慣れない妻の弁当作りや夕食の買い出しや準備など、メニューを考えるだけでもひと仕事でしたが、少しずつメニューの幅も広がっていきました。男性と言うのも単純なもので、妻に感謝され料理などを褒められると、よりやる気も沸いてくるものでした。また、昼間はベビーカーを押しながら近所を散歩することも多かったです。自分の住んでいる環境を改めて見つめ直す機会にもなり、仕事をしながらだと得られない貴重な体験もできたと思います。

このように、育休中の生活リズムはこれまでと大きく異なり、慣れないせいもあって、心身への負担が想像以上であることに気づかされました。それまでの深夜勤務での仕事と甲乙つけ難いくらいの苦労もあり、妻のサポートなしには成り立ちませんでした。ただ、子どもの人生の中でも最も成長著しいこの時期に、一緒の時間を過ごすことのできる幸せ

を感じられ、とても充実した日々を過ごせたことは一生の宝物となると信じています。

また、育休中は自治体や地域が運営している子育てサロンにも、同月齢の子供を持つお母さん達に混じりながら参加させてもらい、子育ての悩みを語り合い、様々な苦労を共有することで、随分ストレス発散になったと思います。最初は男性が私一人であったため、かなり躊躇しましたが、同月齢の子ども同士の触れ合いも子ども自身の成長に大切だと聞いて、勇気を振り絞って参加したところ、子育ての話題が中心ということもあり、珍しさも手伝ってか、お母さんたちが受け入れてくれたのが良かったのだと思います。

こうして、育休という得がたい経験を終え、職場復帰することになりました。保育園への送迎や子どもの急な発熱時などのお迎えにも対応できる深夜勤務のない職場への人事異動

も叶えられましたが、それでも、早朝の登園準備に始まり、寝かしつけまでの間、あっという間に毎日が過ぎ去っていきます。これも、夫婦の協力があってこそ頑張れているのだと思います。きっと、私が育休を取得したからこそ、仕事と子育てのやりがいや楽しさだけでなく、苦労も夫婦で共有でき、お互いに助け合いながら頑張ることができているのだと思います。

最後に、育休を取得することによる職場での評価が気にならなかったと言えは嘘になりますが、復帰後はこれまで休ませてもらった分、今まで以上に頑張ろうという気持ちが強くなり、仕事と家庭生活のメリハリもつき、以前よりも集中して仕事ができるようになったと感じています。現在、妻が2人目を妊娠中ですが、また、是非とも育休を取得してみたいと考えています。



執筆者の横顔：

公務員 5,000人～ 30代前半 30代前半
本人・妻・子 平成19年6月～20年3月(10ヵ月間)



4-21 仕事と家庭の両立の難しさを痛感。子どもについて妻とゆっくり話し合うことで理解が深まる

育児休業を取得して思うこと

當麻 淳 さん

育児休業を決意したきっかけとして、長女を平成 17 年 1 月に妻が出産し、育児していく中で日々の生活が子供中心になり、大変さを実感した為、第二子が平成 20 年 4 月に誕生した時に職場の上司や同僚のすすめもあり、迷わず育児休業取得することを決意しました。

妻が産褥からの回復と第二子の面倒をみるのに精一杯なので、その間長女の心配をさせないためにも最善の育児休業と思いました。

第一子の長女の出産の時はあまり手伝えなかったこともあって、今回この制度を利用する事で精一杯自分にできることをやってみようと思いました。

生後間もない赤ちゃんの子育ては人それぞれ違うと思いますが、私が一番つらいと感じたのは夜中二時間おきに夜泣きし、睡眠時間が削られる時がとてもつらいと感じました。

まして妻は専業主婦として家庭に四六時中いるわけで、子供と接する時間が長く、気分転換したくても小さい子供を抱えているため

気軽に外出することもままならず、妻のストレスが増幅し精神的に追い込まれないように私も仕事に逃げず、一緒に子育てを分担していこうと考えました。勿論小さい子供にとって母親が一番大切な存在で父親に出来ることと言ったら限られてしまいますが、それでも掃除、洗濯、炊事等、手伝えることは山のようにはありました。昔からの考えもあり、男性は仕事、女性は子育て、家事炊事という考えを持っている男性の方も多いと思いますが、子育てにはとてつもない労力と際限もなく神経を使うことが必要だということを知ることができました。

育児休業の期間、生後間もない我が子の成長を見守りながら過ごせた日々は、かけがえのないものとして実感できました。職場の皆さんの理解があつてのことです。

育児休業取得に当たり、職場では男性が取得するのはめずらしいこともあり、取得して何を手伝えるの？等厳しい疑問の声もありま



したが、私の所属する介護課のスタッフは快く送り出してくれました。一カ月という短い期間でしたが三歳児と生後間もない乳児を抱えて、日昼夜過ごしている妻の大変さが身にしみて良く解りました。

又、育児休業を取得してみて仕事と家庭の両立の難しさを痛感致しました。当たり前のことですが、働かなければ妻子を養うことができず、仕事に重点を置けば家庭生活に支障が出てしまいます。仕事での緊張感や疲れから家族と共に外出したりする気分になれず、家でゴロゴロと横になってばかりだと家庭中心がストレスを抱える事になりかねません。

育児休業を取得して妻と子供について、ゆっくり話し合うことで理解することがで

き、今後につながる時間を作ることができました。

育児を分担することで妻の健康も順調に回復でき、さらに職場復帰した時快く迎えてくれた上司や同僚に感謝の気持ちで一杯でした。

これから育児休業を取得しようと考えている方々も沢山いらっしゃると思います。子供の成長は早く、小さいときしか見せない仕草や、あとけない屈託のない笑顔や動作は今しかありません。

周囲にどう思われるか思惑しているより、その時にしか経験できない時間を大切に後悔しない選択をしてほしいと思います。

男性の育児休業取得制度に大賛成！

執筆者の横顔：

介護老人福祉施設介助員 20代後半
20代後半 平成20年5月～6月(1ヵ月間)



4-22 育児は二人なら楽しい。赤ん坊の百面相に笑う毎日。日々のささやかな感動を妻と共有

育父休暇

宮下 拓さん

「言い訳」は、いろいろ考えました。父親の育児休業は、所属部署では初のケースでした。

今の勤務地に私も妻も身内がないこと。妻が出産後も仕事（文筆業）の締め切りを抱えており、私が家事を担わないと乗り切れないこと。妻の実家が自営業で多忙なため、里帰り出産はしないこと。

出産予定日の2カ月前に当たる4月、部長に「育児休業取得をお許してください」と、事情を説明しながら切り出しました。少し間をおいて「分かった。なんとかする」ときっぱりとした承諾を得て、どっと肩の力が抜けました。

ローテーション職場なので、一人の戦線離脱はそのまま同僚の負担増を意味します。上役からは「この経験、きっと今後の仕事に生きるから」と励ましてもらいましたが、職場の厚意に対し、やはり申し訳なさで後ろめたさがあります。復帰後の今でも、そうです。

会社では、第二子出生時に育休取得したケースは他の職場でありましたが、第一子と

なるとそれまで前例がありませんでした。複数の子を持つ先輩や同僚を差し置いて、一人だけの育児のために休業をもらうのは甘えではないか。そう悩みましたが、妻を独り放っておけるはずもありません。腹をくくりました。

人事部には、後押ししてもらいました。妻は「1カ月あれば慣れると思う」と言っていたのですが、担当の方から「奥さんが専業主婦でも産休中でも、お父さんは産後8週間までは育休が取れます。無給ですが」と説明を受けました。無給という点には、ためらいました。でも、生まれたての我が子と過ごす時間はプライスレスだよなあ。そう思い切ることにして、制度いっぱい休むことになりました。

育休中、妻は1～3時間おきの授乳、おむつ替えでふらふら。産後の体調回復に専念させるため、私が家事全般を担当しました。朝食の準備、後片付け。洗濯、掃除、昼食の準備。犬の散歩、買い物、夕食の準備。子の沐浴。一日があつという間に過ぎていきます。

泣けば抱いてあやし、しかし新米の父母は抱き方が下手なので、一層泣かれる始末。お

むつ替えは「どひゃー」の連続。とはいえ、妻と二人いるというのは幸いなことで、片方が疲れてキレないように、意識して笑顔で交代しながら、ペースをつかんでいきました。

実際、これで親子一対一だったら、泣き声に滅入り、自分の食事もままならず、孤立感とひもじさなどで心身とも相当に追いつめられるはずだ、と思います。育児を片親の牢獄にしないためにも、支える手が不可欠でしょう。育児は二人なら楽しい。一人だと過酷です。

近所の育児教室で、よそのお母さんから「パパが抱っこしても泣かないのね」と言われました。

生まれてからずっと抱っこし続けて、下手なりに子が慣れてくれました。育休をとらなかつたら、同じように泣かれて「俺じゃだめだ。ママお願い」となったかもしれません。おむつ替えも同じことでしょう。

母子の二人三脚に父親が途中から参加しようにも、すぐに足並みがそろうわけではない。

だから父親は早々に自信を失い、育児から脱落してきたのでしょうか。ヨーイドンから三人四脚なら、パパだって、抱っこもおむつも、ママと同じように普通にやれるのになあ、と思いました。

数十グラム増減しては一喜一憂し、へその緒が取れたことに驚き、夜泣きで途方に暮れ、ベビーバスでの排泄に慌て、あくび、くしゃみなどに笑う毎日。日々ささやかな感動を妻と共有できた2ヵ月間でした。

新聞のコラムで、パパが育児を「手伝う」と言うのは許せない、と。「二人の仕事でしょ」というわけです。育児休業は、何もできない男をパパとして養成する「育父」期間でした。

多くの男性が、言い訳抜きで「子どもが生まれました。忙しいんで家にこもります！」と職場で宣言し、人生の至福の時を気楽に手に入れられたらいいのになあ、と思います。

復帰後の仕事の“リハビリ”は、やっぱりキツイですが。



執筆者の横顔：

会社員 30代後半 30代後半
本人・妻・子1人(男児1人)
平成20年7月～8月(2ヵ月間)



4-23 ほんの少しの勇気があれば誰でも育児休業は取得可能。仕事にも大きなプラスに

一生記憶に残る私の育児体験記

匿名

平成 17 年 4 月から、私の勤務する会社で「短期育児休業」なる制度が導入されました。子どもが満 3 歳未満であれば、有給で 2 週間育児休業できるのです。私はなかなか子宝に恵まれず、結婚して 7 年目にようやく授かった娘でもあることから、乳幼児の頃は極力一緒にいたいという強い想いがありました。よく先輩からは、「子どもは小学校高学年くらいになると親と口も聞かなくなる。特に女の子は父親離れが早い」とか言われ、親バカな私は、1 分 1 秒でも長く、娘と一緒にいたいし、お風呂と一緒に入ってもらえる期間も一般の父親よりは少しでも長くしたいという考えから、勇気を出して上司に「取得したいです」と宣言しました。「そんな暇があったら仕事しろ！」と一蹴されるかと思いきや、あっさり OK を出してくれたことは意外でした。妻には「仕事をそんなに休んで大丈夫？ 評価を悪くされない？」などと心配されましたが、もう私の考えは取得する方向で固まってました。妻は家事が減ることで嬉しい反面、やはり私の出世が遅れると経済的にも厳しくなる

という現実的な考えを持っていました。さすが女性です。

私は「3 食昼寝付きでしかも有給でラッキー」という不謹慎な、とても甘い考えで育児休業に突入しました。ところがいざスタートしてみると、自分の思い通りに物事が進まず、ストレスの連続でした。まだ 2 歳になったばかりの娘は、言葉が通じません。一体お腹が空いたのか、おしっこなのか、はたまた一緒に遊んで欲しいのか、私にはさっぱり理解できませんでした。育児休業取得前は土日しか娘と一緒にいませんでしたが、育児休業中はフルタイムで 2 週間ぶっ続けで一緒にいましたので、本当に疲れました。「会社に来ていたほうが楽だ！」というのが素直な感想です。でも徐々にコミュニケーションが取れ、「習うより慣れろ」とのことわざが実感できました。また一方で「妻は毎日こんな生活をしてたのか？」ということも理解できました。今まで専業主婦の妻に対し、「生活費を稼いでいるのは自分だ！」というような態度でいたことを恥ずかしく思いました。私は化

化粧品会社に勤務していることもあり、出産を経験した女性の気持ちがほんの少しだけでも理解できたのは大きな収穫でした。

育児休業終了後は、子育て中のママ社員の気持ちが分かりましたし、彼女たちも私にプライベートなことなど話してくれるようになりました。このことは仕事にも大きなプラスになりました。話を元の育児休業中のことに戻します。憧れの「公園デビュー」が果たせたことが何より嬉しかったです。平日の昼間に娘と一緒に公園にいると最初は「この人リストラされたのかしら？」という白い目で見られていましたが、何日かすると、近所のママさんたちとも仲良くなれました。やはり子ども同士が遊んだりすると「お互いさま」という雰囲気が出てきて、おもちゃを貸したり、砂場でシャベルを貸してもらったりするうちに、何でも話せるようになりました。またちょっと自分のタイプのママさんがいると、娘をだしにして、「お子さんととてもかわい

いですね！」なんていうと、話が大いに盛り上がることも体験できました。妻にはもちろん内緒です（笑）。しかしながら、育児休業中の最もよかったことは、娘との距離が大きく縮まったことです。今までは「ママ、ママ」と言っていたところが「パパ、パパ」と呼ぶ回数が増えました。これは本当に嬉しかったです。

こんな素敵な体験を世の中の男性がしないことは勿体ないと思います。しかしその障壁となっているのが、職場の風土であることもよく理解できました。「私が休むとみんなが苦労する」とか「陰口をたたかれる」などというネガティブな考えは、もう古いと思います。ほんの少しの勇気があれば誰でも取得可能です。一人でも多くの男性がこの「一生記憶に残る育児休業」を体験してくれることを願ってやみませんし、私の育児体験は心のハードディスクに深く刻まれています。



執筆者の横顔：

会社員 5,000人～ 40代前半
40代前半 本人・妻・子1人
平成18年3月(2週間)



4-24 子どもや家族がしてほしいのは“一緒にいてくれること”。1日だけでも育児休業の取得を

アナタの子供が、最近1番成長した!ってこと、言えますか?

三輪 吉広 さん

「これから仕事頑張ってくるな。先に寝てるんだよ。」

仕事に出かける父親に、よく言われた。

その時は、それが「仕事熱心な父親」として映っていた。

同じような経験をした子供は、多いのではないだろうか。

しかし、その子供たちが大人になった現在、「男性の育児休業取得」「ワーク・ライフ・バランス」などと言われている。

この流れを振り返ると、私と同世代、つまり「仕事熱心だった父親の子供達」から発信される、“もっと一緒にいてほしかった”というサインのように思える。

ただ、仕事熱心な父親が間違いだとは、思わない。

私は子供の頃、父親と数回だけ、キャッチボールをしたことがある。ある日、キャッチボール中に夕立が降り、雨宿りのために少し休憩。

自動販売機でジュースを買ってもらった。

夕立が止んだ後に見た、虹が忘れられない。一緒に虹の色の数を数えたことを今でも覚えている。

キャッチボールをしたこと、ジュースを買ってもらったこと、虹の色の数を数えたこと……。

すべて「もっと一緒にいてほしかった」という気持ちが根底にあったと思う。

話を現在に戻す。

子供が父親にしてほしい事は何だろうか?大人たち自身が振り返ってみてほしい。

一緒に公園に行きたい、一緒にご飯を食べたい、一緒に散歩したい、一緒にお風呂に入りたい、そして一緒にキャッチボールしたい……。

すべて「一緒に」が付いてくる。根底には“一緒にいたい気持ち”があるのではないだろうか。

しかし現実には、なかなか子供と一緒にいる時間が無いのも理解できる。だったら、育児休



業の取得を勧め、子供と一緒にいられる風習を作るべきではないだろうか。

家庭生活が順調なら、仕事もうまくいくと思う。家庭生活がうまくいっていないと、仕事にも影響がでると思うのは、私だけだろうか。家族や家庭というのは、男性にとって、それだけ「力」になると、私は思っている。

ただ、休みを取るのも、現実には難しい。

育児休業の取得は、決裁権のある上司が、どれだけ理解してくれるか。その気持ちひとつだと思う。

なぜなら、上司といわれる人たちが、若い頃は必死で働いていたから。

そんな上司に伝えたいことがある。

夜遅くまで、会社で残業。次の日の朝も、子供の寝顔に「行ってきます」。子供に会いたくても、手帳や財布に入れた写真を見て我慢……。

それが子供のためだと思ったら大間違いだと思う。子供や家族がしてほしいのは、“一緒にいてくれること”。子供のためを思ったら、それが1番だと、そろそろ気付かなくてはいけない。

最近、自分の子供が1番成長した！ という出来事を、アナタは言えるだろうか？ 今は、言えなくてもいいと思う。むしろ、それに気付いたアナタが素晴らしい。そんなアナタには、1日だけでもいいから、育児休業の取得をオススメしたい。

執筆者の横顔：

会社員 1,000人～4,999人 20代後半
20代後半 本人・妻・母・子2人(女児2人)



4-25 市町村の子育て支援の催しに感謝。ママさん達の中に飛び込むにはほんの少しの勇気があれば大丈夫

きっとどこかに

村田 和之 さん

『結婚して子どもが出来たら育児休業を取るぞ!』

「主夫業」は独身時代からの私の夢でもあった。

昼間に子どもと散歩して、公園で一緒に遊んで……、子どもと共にゆっくりとした時の流れを味わいたいと思っていた。それともう一つ、「主婦は重労働、やってみないとわからない」という言葉、実際にどうなのか体験してみたいという思いもあった。

そんな私も結婚して、子どもが出来ることとなり、いよいよ「夢」の選択権が目の前にぶら下げられた。

まず、妻へ育児休業取得を考えている事を伝えた。「職場の反応、昇進の遅れなど気にならないなら……。」との言葉を添えて、反対はなかった。

妻と話し合い、年度替わりの4月から1年間取得することに決めた。

職場の同僚には、上司への相談前に考えを伝え、ありがたいことに皆賛成してくれた。

上司へは、食事を共にする機会を利用して、その時に相談した。

「今は男女共同参画の社会だからな」何の反対もなく快諾してもらえた。上司にとっても育児休業が身近なものとなった様子であった。

4月になり、いよいよ育児休業がスタートした。

朝起きて、子どもの離乳食作りも含めて、朝食の準備から始まり、妻が仕事から帰ってくるまで、炊事、洗濯、買い物……、やることはたくさんあった。もともと家事が好きな私にとっては、「辛さ」はなかったが、それでも子どもと2人だけで日中会話することなく何日も過ごせるものではない。「大人と会話がしたい」という欲求が生まれる。

市政便りを見て、子育ての集会に応募して参加したり、妻から引き継いでもらった『ママ友』に誘ってもらい、子育て支援センターの集会に参加したりした。

予想していたとおり、父親の参加は自分だけである。1年間の休業中に参加した集まりの中で父親を見たのは3人、いずれも妻と一



緒に参加していて、単独参加は私以外誰もいなかった。

どこに行っても、既に3、4人のグループができあがっていて、そこに飛び込んでいくのは気が引ける。出来れば、育休前に妻や友人を通して『ママ友』を作っておくことをお勧めする。

『ママ友』や『子育て支援センター』、その他、市町村の子育て支援の催しには感謝している。これらのおかげで、1年間育児休業を楽しむことができ、仕事では一生得ることが出来ないであろう経験をさせてもらった。

困ったことがあれば、手助けしてくれる人、場所が必ずある。育児休業中の男性となると『希少動物』として更に丁寧に接してくれる気がする。相談する窓口さえ知っていれば、あとはママさん達の中に飛び込むほんの少しの勇気を出すだけだ。

あれから数年がたち、『ハイハイ』しか出来なかった子どもが、今では私に『あっかんべー』や『キック』をしてくる程成長した。予想通り、私と過ごした日々は全然覚えていないと言う。少し寂しい気がするが、きっと彼の中のどこかに何かが残っているに違いない。



執筆者の横顔：

公務員 5,000人～ 30代後半
30代前半 本人・妻・子1人
平成17年4月～18年3月(1年間)



4-26 「ここにいるわが子のため」に全ての時間を使う。そして、満面の笑みで応えてくれる娘

育児が教えてくれた父親という「仕事」

横川 純一 さん

僕が育休を取ろうと思ったきっかけは、今から5年以上前、妻から聞いた「育休って、男の人でもとれるらしいよ。」という一言です。それから「子どもができたら、育休を取るのも悪くないな」という考えを持つようになりました。その後、長女が誕生し、ひと月もするとまったく別人のように成長する娘の姿を見て、「二度と戻ってこない今の時期に、娘ともっとかかわっておきたい」との思いに駆られるようになりました。

「自分が休めばまわりの人に迷惑がかかる」育休取得に当たってこのことは本当に悩みました。そこで心に決めたのが、「子どものためだけでなく、自分のための今しかできない経験をさせてもらうために育休を取ろう」ということでした。「人員配置をする前に希望を伝

えたほうが良い」とのアドバイスもあり、ある日課長に時間をとってもらい育休をとる意思について正式に伝えました。一番緊張したのはこの時です。課長からは「本当に取るんだね、みんなで応援するよ」と一言。この一言に勇気づけられ、自分自身の決意とともに「はい」と答えました。

育休に入る前は、一日家にいて一体何をしようという不安もありましたが、そんな浅はかな考えは育休が始まると一瞬にして吹き飛んでしまいます。家事と育児で時間に追われる毎日。会社では当たり前の「昼休み」もありません。子どもが離れなかつたりして思うように家事ができないとき、用意した食事を食べてくれないとき、些細なことでも自分に余裕がなくなるとものすごいストレスとなっ





てのしかかります。時には爆発して一緒に声を出して泣くことも。とにかく、妻には早く帰ってきて!!! と毎日思っていました。乳幼児期の子育て中はパートナーの存在がとても大きいことを感じました。

思ったより甘くない育休生活ですが、もちろん育休を取ったからこそ経験できたこともたくさんありました。何よりわが子の「はじめて」に立ち会えたことでしょう。「はじめて立った」「はじめて言葉をしゃべった」などなど、娘の成長を一番近いところで感じられました。接する時間も桁違いです。四季も今まで以上に感じられるようになりました。

ひとりで歩いていると通り過ぎてしまうような景色も娘と見るとまた違って見えました。ばかばか陽気の時に砂場で寝っころがったこともありました。自分の子ども時代を思い出しました。

会社での仕事は「大勢のだれかのため」の仕事です。しかし、育休中は「ここにいるわが子のため」に全ての時間を使っています。そして、彼女はそれに応えてくれます。満面の笑みでかけてくる娘の顔を見て、自分はこの子の父親なのだ、ということを実感させられます。一年間の育休生活でそれを強く感じることができました。



執筆者の横顔：

公務員 5,000人～ 30代前半
30代前半 本人・妻・子1人
平成19年4月～20年3月(1年間)



4-27 慣れてくると、「こわごわ」から「てきぱき」に。沐浴、一緒のお風呂、外出をステージごとに感動はつきない

男性だって 育休くらいは

吉田 昌哉 さん

一人目の時も二人目の時も、育児休業をとった。

最初の子の時、妻は「当然、取るんでしょ」と、育児休業制度があるのに、それを利用しないなんてことは想像もしていなかった様子で、そのつもりで出産と出産後の計画をたてていた。「これって、絶対取らなきゃいけないのか」と自問した。「絶対か？ と言われれば、特に、そういうわけでは」という言葉をぐつとのみこんで、決意した。妻との約束もあり、それにお腹の中にいるころから、話しかけてきた子どもの、せめて生まれたばかりの頃くらいは、世話をしたいという思いがあった。子どもに父親の代わりはいないが、仕事場ではいくらでも代わりがきくんだ、と割り切った。

生まれたばかり人間との出会いは、驚きの連続だった。あの軽さ、首が座らず、ふにやふにやで、誰かが面倒を見なければ命すら維持できない無力さ。全面的に私の保護下にいるんだという支配感。命を看るといふ使命感。

妻と子どもが退院して、わが家に戻ってからは、本当に過酷な「労働条件」だった。お

むつを替えるときは、足をばたばたさせてなかなか簡単にはやらせてはくれない。へそを消毒したり、ミルクを作ったり、沐浴させたり、哺乳ビンの消毒、上の子は飲む以上に吐く子で、ミルクの後は随分長く肩にのせて背中を叩き、もう大丈夫かとベッドにおろすと、ゲップとともに苦労して飲ませたミルクが……。毎日同じことのくり返し、面倒くさいがマニュアル通りにやらなければ心配で、手を抜くことができない。

赤ん坊の面倒は、途中で「やって」と言われても、絶対にできないし、それ以前に妻の方で任せではくれない。最初から24時間一緒にいたからこそ、やり遂げられたのだと思う。慣れてくると、「こわごわ」から「てきぱき」に。ミルクの時はわざわざ1階に降りていたのを、魔法瓶にお湯を入れておく方法を大発明したときには「我ながら」と感動した。こういうことって、具体的にどこにとは言えないが、確実に仕事に役に立っていると思う。沐浴を卒業して一緒のお風呂、最初の外出、ステージごとに感動はつきない。

最初の育児休業は、2か月程度。育休明け



の出社も、ちょっと長い夏休みといった感じで、部署が違えば「育休、取ってたんだ」と、特に珍しい目で見られることもなかった。2か月間は、休んでいる方は長く感じるけど、職場の方ではあっという間のことなのだろう。でも、あの2か月、本当に価値のある2か月だった。

二人目の時は、自分という前例があったので、より抵抗なく、より長く育休を取ることができたし、職場の方も取らせることができたと思う。その意味でも、最初の育休の意義は大きい。赤ん坊の面倒は、2回目ということもあり、手の抜き方を心得たのでだいぶ楽になった。お姉ちゃんになった上の子も、手伝ってくれる。一人目の時に育休を取らなかつたら、二人目の時も取らなかつたであろうし、その前に二人目を産むことを（特に妻

は）躊躇していたであろう。

ある時、ベビーベッドの部屋から声が聞こえるのでそっと見てみると、お姉ちゃんが母親のように赤ん坊に話しかけていた。本当に2人を生んでよかったと思った。平和とか幸せを具象化すると、きっとこんな絵になるんだろう。世界中のすべての男性が子育てに携われれば、戦争なんて起きないのだろう……とも思った。

そんな娘達も10歳と5歳になった。下の子ども幼稚園に行き、いつの間にか僕の知らない自分の世界を作っている。「ふにやふにや」が懐かしく、「もう一人」ということも考えたが、今度は孫の時に「育休」を取ることしよう。男は子どもが産めない分、育休くらいは取らないと、絶対損をする。



執筆者の横顔：

団体職員(非営利団体含む) 0~99人
40代後半 30代後半
本人・妻・子2人(女兒2人)
平成10年4月~6月、15年6月~8月(5ヵ月間)

